

第Ⅰ章 序 言

本書は、奈良県奈良市佐紀町に所在する特別史跡平城宮跡第一次大極殿院地域において、奈良国立文化財研究所（当時）、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所（当時）、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（現）（以下、これらを奈良文化財研究所と記す）が、2005年度までに実施した発掘調査の成果をまとめたものである。第一次大極殿院の報告としては、1982年に刊行した『平城宮発掘調査報告 XI 第1次大極殿院の調査』（以下、『平城報告 XI』と略記する）に続く第2冊となる。

1 調査の経緯と経過

A 『平城報告 XI』と時期区分

まず、『平城報告 XI』までの調査の歩みについて、簡単に説明しておこう。平城宮跡は、1952年3月に特別史跡に指定された。1953年度には、奈良精華線の道路拡幅工事にともない、文化財保護委員会が発掘調査を実施した。それ以降も、開発が相次ぎ、1955年度には奈良文化財研究所が平城宮跡の調査を開始した。当初は開発を原因とする調査が多かったが、平城宮跡の国有化事業にともない、1959年度以降は奈良文化財研究所が平城宮の全容解明を目的として、計画的な調査を継続的におこなってきた。そして現在までに、400次を超える調査を実施し、平城宮の構造、遺構の変遷について宮内の各地区で数多くの成果を挙げている。それらのうち、第一次大極殿院・第二次大極殿院・内裏・東院庭園・馬寮・兵部省などの宮殿・官衙・庭園それぞれについての調査成果は、『平城宮発掘調査報告』のI～XIIIとしてすでに刊行している。

さて、第一次大極殿院地域は、平城宮朱雀門の真北に位置し、天皇が即位式をおこなうなど非常に重要な地域であった。この第一次大極殿院地域における1979年度までの調査成果は、『平城報告 XI』でまとめており、奈良時代初期から平安時代までの主要な遺構を3期に大別し、各期を次のように位置づけた。

『平城報告 XI』の
3期区分

I期は、この地区が大極殿院として機能していたほぼ奈良時代前半にあたる遺構群の時期である。東西500大尺（600小尺）、南北900大尺（1080小尺）の区域を築地回廊で囲み、南面中央に大極殿院南門が開く。I期は、さらに4小時期に細分できる。I-1期は、築地回廊内部の北側の約3分の1にあたる一段高い場所に大極殿と後殿を配置し、南側の約3分の2を礫敷としていた時期で、藤原京から平城京へ遷都した時の状況を示すと考えた。I-2期は、南方に朝堂院を建設し、東西の楼閣を南面築地回廊に付設した時期で、神亀年間（724～729）から、天平初年頃までと推定した。I-3期は、恭仁京遷都に際して、大極殿と東西築地回廊を恭仁宮に移建した、天平12年（740）から天平17年（745）の間と推定した。I-4期は、天平17年に平城へ還都したのち、東面と西面の築地回廊を復興した時期であるが、大極殿を再建した形跡は

ない。

Ⅱ期は、天平勝宝5年（753）以降、奈良時代後半を通じて存続した遺構群の時期である。東方の内裏と南限と北限とを揃えて、築地回廊を東西600尺、南北620尺に縮小した。また、築地回廊内部の北部分の高台をやや南に拡張し、ここに27棟からなる建物を密に配置した。このⅡ期の遺構を、『続日本紀』等に記される「西宮」に比定した。

Ⅲ期は、平安時代初期に平城太上天皇が建設した平城宮の時期である。地割りは、Ⅱ期のそれを踏襲し、高台の建物は14棟となっている。

このように『平城報告XI』では、第一次大極殿院地区においては、各時期それぞれにまとまりがあり、かつ他の時期と明確な違いのある構造・建物配置が確認できることを明確にした。

B 宮跡整備と発掘調査

平城宮跡の整備が継続的な事業となったのは1964年である。当初は、奈良県が事業主体となり、国の補助事業として、建物配置の表示等を中心に、盛土・芝生・敷砂利による整備をおこなっていた。1970年度以降は、奈良文化財研究所が平城宮跡の管理・整備・運営を担当するようになった。第92次調査（1974年度）は、整備にともなう浄化水槽設置のための事前調査であった。なお、『平城報告XI』で、第28次調査（1965年度）や第92次調査について触れなかったのは、その報告対象地を西側は西面築地回廊までとしたため、その西外側を南流する基幹排水路は対象域外となつたためである。

特別史跡
平城宮跡
保存整備
基本構想

1978年には、平城宮跡全体を「遺跡博物館」と位置づける『特別史跡平城宮跡保存整備基本構想』が定められた。これ以降、この方針に沿って平城宮内の整備が進められてきた。この構想では、宮跡内をゾーニングし、それぞれの地区について整備の基本方針が定められている。第一次大極殿院地域については、奈良時代後半の宮殿地域の復原展示ゾーンとして位置づけられた。

これ以後に実施された、第一次大極殿院地域の調査を概観しよう。第170次調査（1985年度）は、当地点の国有化にともなうものであった。東面築地回廊北東隅近くの調査で、東外部を南流する基幹排水路や掘立柱塀を検出した。同年の第177次調査（1986年度）では、西面築地回廊の西外部で東西方向の溝を検出した。第192次調査（1988年度）は、宮内道路付け替え予定地の事前調査である。調査地は西面築地回廊南半部にあたり、東西の区画施設が第一次大極殿の中軸線で正確に折り返した位置にあることが判明し、その変遷を跡づけることができた。第217次調査（1990年度）は、第一次大極殿院地区整備のため、大極殿前面を東西に走る旧構内道路を撤去することにともない、同地区の東西両面の築地回廊および大極殿前面の広場北端部の解明をめざして実施した。調査地は第一次大極殿院南半部を東西に貫く位置にあたり、東西両築地回廊と石積擁壁部分の状況と変遷についての所見は、『平城報告XI』の変遷案を追認することになった。

1978年に定められた『特別史跡平城宮跡保存整備基本構想』で復原することになっていたのは奈良時代後半の殿舎群であったが、その後、奈良時代前半の大極殿の復原へと基本方針が大きく変更された。そして、この新方針にしたがって、1988年から奈良文化財研究所が、第一次大極殿院地区復原整備のための基礎調査を開始した。1993年3月には、文化庁が設置した大極

殿復原構想検討会議が第一次大極殿院復原の方針を文化庁長官に対して報告し、第一次大極殿院の復原が決定された。

第一次大極殿院の復原

このように、復原事業の対象が奈良時代後半の殿舎群から、第一次大極殿院へと移行したこと、復原地区の変更・拡大、設計のための再測量、規模の確認等々、早急に解決すべき種々の問題が出てきた。

第262次調査（1995年度）は、第一次大極殿復原設計のための地盤調査にともなうものである。第一次大極殿基壇西部にあって、地覆石据付痕跡と地覆石抜取痕跡を検出し、小面積の調査ではあったが基壇規模を確定できた。第295次調査（1998年度）は、調査地が西面築地回廊から大極殿西半部および、大極殿北面階段・西面階段を検出して基壇規模を確定できたが、西面築地回廊心が推定位置よりも西にずれるなどの新たな問題点が浮かび上がった。第296次調査（1998年度）では、築地回廊西南隅を調査し、東西対称性や從来の時期区分の妥当性を再確認した。第303-13次調査（1999年度）は、測量値の整合をはかるなどを主な目的とし、北面築地回廊で実施した4箇所の再確認調査である。第305次調査（1999年度）では、西面築地回廊から磚積擁壁にかけて、磚積擁壁の具体的な構造を把握する目的で実施した。第311次調査（1999年度）では、大極殿の既調査部分5箇所について、再測量をおこなった。第315次調査（2000年度）では、西面築地回廊と西側基幹排水路をつなぎ位置について、両者の変遷過程を跡づけた。第316次調査（2000年度）では、西面築地回廊外の西側で、かつ現在の佐紀池の南側に隣接する位置で調査をおこない、西面築地回廊の北部分の、西へのずれが地盤に起因するものか、当初からのものかを明らかにするために、造成土の変遷を確認した。第319次調査（2000年度）では、築地回廊北西隅を調査し、西面回廊のズレは、造成土の不等沈下によって引き起こされたとの所見を得た。第337次調査（2001・2002年度）は、南面築地回廊の西楼の調査であり、東楼の調査で確認した造営・改修・解体の過程を追証した。第360次調査（2003年度）では、南面築地回廊西半部を調査し、これまでの調査所見が基本的に正しいことを確認できた。また、第389次（2005年度）は中央区朝堂院地区北辺部の調査だが、第一次大極殿院南門の南階段が改修を受け、南側へと拡張されていたことを明らかにした。

なお、本報告の対象外ではあるが、第389次以降の調査にも触れておこう。第431次（2008年度）は南面築地回廊の東端部付近における調査で、南面築地回廊の調査はここに終了した。また、第432・436～438次調査（2008年度）は西面築地回廊における一連の発掘調査であり、大極殿院回廊の発掘調査はここに終止符を打った。さらに、第454次調査（2009年度）では第一次大極殿院の内庭東南部をそれぞれ発掘調査している。これらについては、別の機会に報告する予定である。

C 第一次大極殿の復原

奈良文化財研究所は、第一次大極殿の復原整備に関する基礎調査も同時におこなっており、1992年には、大極殿設計復原部会を組織し、当年度だけで6回におよぶ検討会を開いた。この成果にもとづき、1993年度には『平城報告XI』で示した復原案を修正のうえ、新たな復原図を作成し、大極殿院の100分の1模型を製作した。続く1994年度には、平城宮復原建物設計専門委員会の指導のもと、所員が設計案を再検討し、1995年度末には修正した大極殿の10分の1模

型を完成させた。

これらの成果を受けて、1995年度と1996年度に第一次大極殿の基本設計をおこなった。なお、その図化は財団法人文化財建造物保存技術協会（以下、文建協と略す）が担当した。そして、1997年度には実施設計の準備、1998年度から2000年度には実施設計を完了した。

2001年度には第一次大極殿正殿復原工事が開始されたが、同年4月の奈良国立文化財研究所の独立行政法人化にともない、平城宮跡の管理が文化庁の直営事業となり、大極殿の復原事業も文化庁の事業になった。その結果、工事監理は、文部科学省文教施設部と文建協が担当し、奈良文化財研究所は指導助言というかたちで大極殿の復原にかかわることになった。このため、この後は奈良文化財研究所が調査研究にもとづく設計修正案を提案し、文化庁記念物課史跡整備部門が最終決定をおこなうこととなった。

奈良文化財研究所では、第一次大極殿復原の指導助言のため、①基壇・礎石、②木部、③彩色・金具、④瓦・屋根について所内で度重なる研究会を開き、正確な復原をめざした。その成果は、2008～2010年度に『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究』1～4としてすでに刊行している。それぞれは平城宮第一次大極殿にかかる直接資料（遺構および出土遺物、または絵画資料・文献史料）や事例研究、復原の過程について述べ、最後に復原案を示している。検討の項目は多岐にわたるが、詳細は各書にゆずりたい。なお、第一次大極殿は、2010年4月に竣工・完成した。

第一次大極
殿復原工
事の完了

2 調査体制

ここでは調査責任者（所長・部長）と調査担当者をかけ、参加した他の調査員に関しては一括して列記する。

次数	年度	所長	部長	調査担当者
28	1965	小林 剛	樋本亀治郎	高島忠平
92	1974	小川修三	鈴木嘉吉	佐藤興治
170	1985	坪井清足	岡田英男	山崎信二
177	1986	鈴木嘉吉	町田 章	毛利光俊彦
192	1988	鈴木嘉吉	町田 章	小野健吉
217西	1990	鈴木嘉吉	町田 章	館野和己
217東	1990	鈴木嘉吉	町田 章	森本 晋
262	1995	田中 琢	町田 章	岸本直文
295	1998	田中 琢	田辺征夫	蓮沼麻衣子
296	1998	田中 琢	田辺征夫	古尾谷知浩
305	1999	町田 章	田辺征夫	高橋克壽
303-13	1999	町田 章	田辺征夫	中島義晴
311	1999	町田 章	田辺征夫	高瀬要一
313	2000	町田 章	田辺征夫	吉川 聰
315	2000	町田 章	田辺征夫	吉川 聰
316	2000	町田 章	田辺征夫	清水重敦

319	2000	町田 章	田辺征夫	浅川滋男
337	2001	町田 章	金子裕之	長尾 充・清野孝之
360	2003	町田 章	岡村道雄	山本 崇
389	2005	田辺征夫	川越俊一	中川あや

調査参加者

阿部義平 綾村 宏 石井則孝 石橋茂登 市 大樹 伊東太作 井上和人 今井晃樹
 岩永省三 上野邦一 内田和伸 大河内隆之 大林 潤 岡本東三 小澤 育 金田明大
 狩野 久 川越俊一 清永洋平 工楽善通 栗原和彦 小池伸彦 高妻洋成 小林謙一
 佐原 真 島田敏男 神野 恵 鈴木 充 畠淳一郎 田中哲雄 玉田芳英 千田剛道
 次山 淳 寺崎保広 豊島直博 西口壽生 西山和宏 箱崎和久 八賀 晋 花谷 浩
 馬場 基 藤村 泉 藤原武二 降幡順子 松下正司 松本修自 三輪嘉六 村上 隆
 本中 真 本村豪章 森 公章 山沢義貴 横山浩一 和田一之輔 渡辺晃宏 渡辺丈彦

3 報告書の作成

報告書の作成は、都城発掘調査部平城地区が担当し、2004年度から報告書作成作業を開始した。

遺物の整理は考古第一研究室、考古第二研究室、考古第三研究室および史料研究室が、遺構の整理・検討は遺構研究室が担当した。木製品の樹種鑑定は埋蔵文化財センター年代学研究室大河内隆之がおこなった。石材は同保存修復科学研究所肥塚隆保、高妻洋成、脇谷草一郎の鑑定による。

本報告書に掲載した写真は、佃幹雄、牛嶋茂、中村一郎、杉本和樹がそれぞれ撮影した。

遺物の実測、図面の浄書は東仁美、有田洋子、家城りゅう、今津朱美、上田元子、大谷寧子、小倉依子、掛本紀子、鎌田礼子、北野智子、北野陽子、釣澤承子、小池綾子、高田美佳、出口安子、土井智奈美、仲川真奈美、福島昌恵、宮崎美和、森下しのぶの助力を得た。また、編集に際して南部裕樹の助力を得た。

報告書の作成に際しては、各研究室で指名された担当者による合計8回の検討会を経て、各担当者が執筆し、これを編集者がとりまとめた。編集と各研究室の担当者は、以下のとおりである。

編集：深澤芳樹（～2008年度）・難波洋三（2009・2010年度）

遺構研究室：大林 潤・金井 健

史料研究室：山本 崇

考古第一研究室：和田一之輔・国武貞克

考古第二研究室：森川 実

考古第三研究室：林 正憲

執筆者は、以下のとおりである。

第Ⅰ章 序 言：深澤芳樹・難波洋三

第Ⅰ章 序 言

第Ⅱ章 調査概要

- 1 調査地域：大林 潤
- 2 調査の概要：深澤芳樹・大林 潤
- 3 調査日誌（抄）

第Ⅲ章 遺 跡

- 1 第一次大極殿院の地理的状況：金井 健
- 2 地形造成の変遷：大林 潤
- 3 検出遺構：金井 健・大林 潤

第Ⅳ章 遺 物

- 1 木 簡：山本 崇
- 2 瓦磚類：林 正憲
- 3 土器類：森川 実
- 4 木製品：和田一之輔・国武貞克
- 5 金属製品・石製品・錢貨：和田一之輔・国武貞克
- 6 植物遺体：国武貞克
- 7 木 棍：大林 潤

第Ⅴ章 考 察

- 1 遺構変遷と地形復原：大林 潤
- 2 史料からみた第一次大極殿院地区：山本 崇
- 3 建物廃絶時の祭祀：和田一之輔
- 4 軒瓦からみた第一次大極殿院地区の変遷：林 正憲
- 5 土 器：森川 実

第VI章 結 語：井上和人

英文要旨：Walter Edwards (訳)